

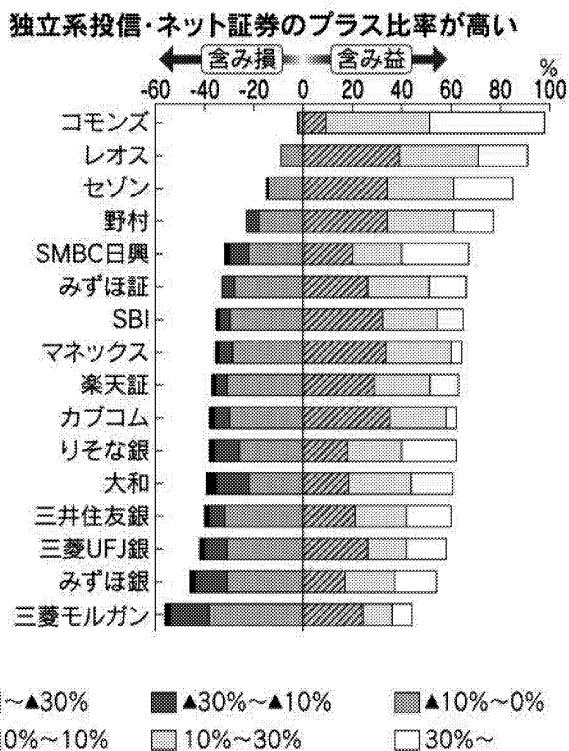
# 投信「成績表」初の全社開示

投資信託を購入した投資家の何割が損をしたのかを得る。主要会社を調べると、主に個人が金融機関を選ぶ目安となり得る「成果指標（KPI）」をすべての金融機関が公表することになり、投資家が初めて比較できるようになった。主要会社を調べると、含み益の顧客が9割に上る一方、5割を下回る金融機関もある。見方に注意も必要だが、各社の違いがくっきり表れた。

## 「優等生」独立系で多く

### 積み立て投資が奏功

KPIは金融機関の成り行きを運用する「一括で購入した投資家」に比べて、積み立て投資家に対する「含み損」の割合が低くなる傾向がある。野村証券はインドル株の投資も大きく貢献した。一方、銀行は債券型や債券で運用する毎月分配型投資信託が相対的に多い。債券型も世界的な金融緩和のもとでここ10年ほど金利低下傾向が続いている。また、長い目で見た運用環境は良くなかった。FJ、三井住友、みずほの3メガバンクは開始時期を明示していない。



成績の算出にクセもある。まず算出開始時期が異なる。1999年の楽天証券、04年の大和証券、13年の野村証券は経済環境がバラバラの時期だ。三菱UFJ

## 投資家の「心の壁」壊せるか

「売却益などを考慮せずに開示すると不利に映る」。当初、銀行などから反論が相次いだ。このため、一部の金融機関では売却益などを加味して「実績」に近い成績を公表する動きも出始めている。だが、「それでも成績は1割ほどの改善にとどまる」とが多い（金融庁幹部）。初年度のため、現時点で時系列比較もできない。数年にわたるデータの蓄積がなければ難しい。銀行や証券会社によって、株や債券など取り扱う投信の特徴が異なる点にも注意が必要だ。安定的な資産形成を実現するために「人生100年時代」を見据えた長期投資は一段と重要だ。金融機関によって異なる成績を個人投資家はどう読み解くか。「投資は自己責任」という原則に照らせば、最後には個人投資家のリテラシー向上も力を握る。（根本舞、南毅郎）

商品に追い風が吹いた。野村証券はインドル株の投資も大きく貢献した。一方、銀行は債券型や債券で運用する毎月分配型投資信託が相対的に多い。債券型も世界的な金融緩和のもとでここ10年ほど金利低下傾向が続いている。また、長い目で見た運用環境は良くなかった。FJ、三井住友、みずほの3メガバンクは開始時期を明示していない。

「売却益などを考慮せずに開示すると不利に映る」。当初、銀行などから反論が相次いだ。このため、一部の金融機関では売却益などを加味して「実績」に近い成績を公表する動きも出始めている。だが、「それでも成績は1割ほどの改善にとどまる」とが多い（金融庁幹部）。初年度のため、現時点で時系列比較もできない。数年にわたるデータの蓄積がなければ難しい。銀行や証券会社によって、株や債券など取り扱う投信の特徴が異なる点にも注意が必要だ。安定的な資産形成を実現するために「人生100年時代」を見据えた長期投資は一段と重要だ。金融機関によって異なる成績を個人投資家はどう読み解くか。「投資は自己責任」という原則に照らせば、最後には個人投資家のリテラシー向上も力を握る。（根本舞、南毅郎）